

タマゾン川 多摩川でのちを考える

梅林中 一年 YG

「これはもう、タマゾン川だな。」

その言葉は、新聞に大きく取り上げられ、以来、「タマゾン川」という言葉は、2007年の流行語大賞の候補となったぐらい注目を浴びました。

ではなぜ、「タマゾン川」と呼ばれるのか。そこには我々人間が関係していました。

そもそも「タマゾン川」とは、何なのでしょう。実は多摩川のことなのですが、「アマゾン川」などに生息する、本来なら日本にはいない魚が次々と発見されたために、「タマゾン川」と呼ばれるようになったのです。そして、その魚を放流していたのが、我々人間なのです。

さて、日本にもともといない魚たちがいると、どんなことが起きるか。それはとても大変なことでした。

みなさんは、外国の魚がいるとどうなると思いますか。ある子に聞くと、

「たくさんの魚がいるからいいんじゃないの。」と答えました。しかし、そんなに甘い話ではないのです。

みなさんは、食物連鎖という言葉を知っていますか。生き物には、「食べる・食べられる」という関係があります。川を例に取れば、水中のプランクトンを昆虫が食べ、その昆虫を魚が食べ、その魚を鳥が食べ、鳥はより大型の鳥やイタチなどのほ乳類に食べられる、このような鎖のような関係のことを食物連鎖と言います。生き物が生きる

環境は、そうした食物連鎖に加え、その場所の地形、水質、気候などが複雑に絡み合っ成り立っているのです。その全体のシステムが生態系です。

生態系は、気の遠くなるような時間をかけて作られたもので、上手にバランスが取れていません。だから、食べられすぎたり、環境に適応できなくて絶滅するような種はいます。しかし、そこに突然ほかの場所からやってきた生き物、つまり外国の魚が入ってくるとどうなると思いますか。例えば、日本のフナはブラックバスと一緒に暮らせるように進化していません。同じ場所になれば、食べられて数を減らすでしょう。そして、フナが減れば、今度はフナのえさであったプランクトンや昆虫が逆に数を増やします。たった一種類、外国の魚を入れてしまうことによって、こんなにも生態系が壊れてくるのです。本当に驚きました。

しかし、このような問題を改善しようと努力している人もいます。その対策とは、「おさかなポスト」というものです。まず、外国の魚たちというものは、自分たちで来たわけではありません。やはり人間がペットとして買ったものの、それなんらかの理由で川などに捨てたりしたので、どんどん外国の魚が増えてきたのです。そこで、この「おさかなポスト」が力を発揮するのです。このポストはこのように、ペットを捨てようとしている人たちを止めて、このポストに捨ててもらい、そして捨てられたペットの里親として引き取ってもらえる人を探すというものです。すると、一日に何万人という人たちが来ました。ここにばくは、

こんなに捨てるなんてびっくりしたし、もつと最後まで責任をもって飼うべきだと思いました。だけど、これをする事で事態は少しずつ改善されてきました。しかし、多摩川での災難は、外国の魚問題だけではありませんでした。

一九六〇年から七〇年、日本は高度経済成長期と呼ばれる時代がありました。そのときの多摩川は、「死の川」と呼ばれていました。その理由は、家庭から捨てられた排水にありました。暮らしに水は必要不可欠です。洗濯にトイレ、お風呂……、私たちは毎日たくさんのお水を使います。その水はそのまま川に流れたため、川が汚れました。そのため、多摩川は、「3K」、すなわち、「くさい」「きたない」「きけん」という、とても恐ろしい川になってしまいました。

しかし、絶望的なこの状況を変えようとした人がいました。それは、当時の東京都知事である、美濃部亮吉さんでした。この人は、積極的に下水処理場の建設を進め、地下に下水道管を設置していききました。すると、年が経つにつれて、だんだんと川がきれいになっていったのです。そして、汚れた多摩川に、消えてしまった魚たちが戻ってきました。

この本を読み、やはり人間が自分勝手な考えや行動で生き物を殺したり自然を壊したりするのはよくない、だからもっと自然のことを理解し、大切にしていきたいと思いました。